

編集室

* 「エレクトロニクスの多様化を支える新デバイス技術—2020年を見据えて—」特集は、いかがでしたでしょうか。パラダイムシフトの必要性がうたわれるデバイス産業界において、技術面から支えていく可能性を持つ幾つかの候補を読者の皆様に御紹介できたとすれば幸いに思います。

* 特集の構成と致しましては、各技術候補の概要について、それぞれの領域において日本を代表する先生方に解説をして頂いた一方、すべての記事を俯瞰しての「まとめ」的な章は、あえて設けておりません。編集チームとしては、ありきたりで無難な「まとめ」を用意するよりも、読者皆様それぞれの「まとめ」を作って頂くことが、デバイス産業界におけるパラダイムシフトにつながるのだと考えております。

* さて、本特集は、10年後に必要とされる技術候補を取り上げたわけですが、この10年後というのは、「編集にあたって」で御説明申し上げたデバイス技術における限界が顕在化する予測時期という事実だけでなく、我々が、語呂が良いと感じて使うことの多い、「10倍」、「10分の1」といった表現と同じ、10のべき乗の数字を用いて未来の時期を示した表現でもあります。100年後になってしまいますと、自分の人生のうちでは体験することがないかもしれない未来になってしまい、現実味のない技術予測にもなりがちですので、10年後くらいが適切な未来なのかもしれません。

* 10のべき乗を用いた表現を語呂が良いと感じるのは、恐らく、我々の日常身近なところで接する数字が10進法表記であることが理由で、位が変わる数字であるからではないでしょうか。けたが変わるということなので、けた違いな変化が期待されるのかもしれませんが。

* 最後に、本特集は、およそ1年前より平成21年度の会誌編集委員会WG・C委員によって企画・編集がなされてきたものです。支えて頂いた皆様に心より御礼を申し上げますとともに、今後の学会及び学会誌の発展を祈ってやみません。

(前編集特別幹事 安藤 淳)

* 今年の5月から編集特別幹事を担当することになり、伝統ある電子情報通信学会誌の編責の一端を担うことの責任の重さを感じている。過去には委員として参画させて頂いたことがあるので編集委員会の業務はある程度把握しているつもりであるが、今後は編集特別幹事として編集委員の皆様の見解を取りまとめ魅力ある誌面作りを先頭に立って推進していくことが重要な任務となる。とはいっても、私が無理に先頭に立たなくても、編集委員の方々にそれぞれの専門分野で最先端の技術の動向について記事の立案、執筆者の選定などを積極的に行って頂き、大いに助けてもらっているのが実状である。実際、編集委員会での議論は、多岐にわたる分野の最新技術動向について活発に行われ、大変刺激的で楽しいものである。このような雰囲気の中での活発な議論の末、最終的な会誌記事へと結び付くのだが、読者の皆様にも編集委員会の議論と同様に刺激的で興味深い記事を提供できるように心がけて、新しい任に当たる所存である。

* さて、私が担当している分野は、情報・システム分野で日進月歩に技術の進展が激しい分野である。一昔前と違って研究フェーズから実用化フェーズまでのスパンが短くなっているため、常に最新の動向をキャッチアップしなければあっという間に時代遅れとなってしまうぐらいである。会誌記事にもそのような状況を反映して、時代の最先端を先取りした技術を取りこぼすことなく紹介していかなければならない、と肝に銘じている。最近では、純粋な工学分野でなく、いわゆる、融合領域の研究への関心が高まっているように思える。デザイン、芸術、心理など従来は人文系が担ってきた分野が理系の研究と融合し、今までの枠組みにとらわれない新しい研究分野が次々と創生されている感がある。私が興味を持っている、人間を扱う科学の分野でも、人文系で培われてきた知見に基づき、人間の営みを情報科学的なアプローチで解明しようとする試みが盛んに行われているように感じる。そのような新しい研究の動きにもアンテナを張り、いち早く会員の皆様に伝えるのも編集委員会の重要な使命である。

(編集特別幹事 苗村昌秀)